

石見の海の角の浦のあたりのことを

良い浦がないと人はいう

良い潟もないと人はいう

良い浦はなくてもいい

良い潟はなくてもいい

潟はなくても鯨を採り

海辺に向かって和多津の荒磯の上に

青々とした美しい藻 沖の藻を運ぶ

鳥の羽ばたきのような朝の風が寄せてくる

夕方にはまた寄せてくる やさしい波がある

波のたゆたがある でもそれよりも何よりも

美しい藻のような やさしく寄り添い暮らした妻を

露や霜のように 別れ残してきたので

この高角山を越える道の曲がり角ごとに

何度も――振り返り――見るけれど

いよいよ遠く里は離れ

いよいよ高く山も越えてきてしまった

きつと夏草のように思い萎れて 私を偲んでいるだろう

妻の家の門を見たい いっそなびいてしまへこの山よ

石見の高角山の木々の間から

私が振る袖を妻は見えてくれているだろうか

この山の笹の葉はさやけく語りかけてくるけれど

私は妻への惜別の思ひばかり

